

観光は差別化という偏狭な考えが気になる

◆ 新時代の観光を PR する方が、某県の山岳観光資源を他地域との差別化を主張して誇らしげに講演されておられた。講演終了後にその方に「あなたの考えはモット広げた方がいいですよ」と注意したことがある。以下はそのときの話。

◆ どの地域でも、活性化は観光からと考えていて、観光資源をモータースポーツに PR することがほとんどである。特に、若い方々が起業の一環として街づくりと観光をリンクさせて、当該地を宣伝しまくる。そして、行き着く先は差別化であり、手前味噌な宣伝である。例えば「都会なんかに住んでおれないでしょう、ならば当該地に来て」というキャッチフレーズがある。

彼らの語りは確かに熱い。しかしながら、考え違いはなほだしい。それでも人が来てくれればということなのだろうか、彼らに注意する方々がほとんどいないのも不思議である。街づくりや観光はそんな次元に陥らないようにしたいものである。

◆ 以下に、具体的に考え違いを指摘する。

(1)観光におもてなしの心をいれたいといって、手作りを第一として、周辺の方々を巻き込むことが観光サイドで考えられている。それもいいが、当該地の方々が何のための観光かを自分の事として認識しない限り、おもてなしも単なる商品のひとつとなってしまう。商品でもいいという声が聞こえてきそうだが。

(2)当該地のすばらしさをいうあまり、我田引水を通り越して他の地域をさげすむという失態を演じている。確かに、(すばらしい自然景観の)当該地の自然のスケールは他に比して群を抜いている面はある。だからといって、他はだめという論調にはならないのではないか。例えば、男性的な山の魅力は女性的な山の魅力とは違っている。それを男性の方がいいなどということばをかけていることは自明である。馬鹿さ加減がみえていないことがそもそも問題であるが。

(3)地域連携の声が空虚に聞こえる。観光サイドは東京のみならず、近県からも当該地に来て欲

しいという。それが連携というものともいう。まるで連携の意味を理解していない。各地域にすばらしい風土があり、それを相互尊重するからこそ他の地域との連携が出来るのであり、他の地域にも出かけ自分のところと違った風景を堪能できるのである。重要なのは、良さを堪能するセンスを自分の中に育てることであり、周辺の地域で良さを見出すことではなかろうか。(4)特に困ることは風土と地域民とが一体であることを認識できない方がいることである。単にいい景色のみを主張していても、そこには住民の姿さえ見ることもなければ感ずることもないのが実情のように思える。

◆ 結論を展開しよう。彼らの一番の考え違いは、風景風土と人間は一体であることを認識していないことである。山を例に説明する。

山については、荒々しい山岳地域ではきびしい自然に畏敬の念を持つことになろうし、静岡なら富士山や日本平、あるいは三保の松原など雄大なスケールを情緒とともに堪能する気質も生まれてこよう。このようにどの地域でも、風景と人間がセットになっており、県民性もそこから生まれているといえる。すなわち、人間が風土を作り、風土が人間を育てているということである。

そこには、人間に優劣などあろうはずもなく、人間とセットになった風景風土にも優劣はない。そこに優劣を入れようとするところに、人間性を忘れてしまい、ただ某地域に観光客が来てほしいというだけになってしまうのであろう。

それにもうひとつ、連携ということについて。連携は相互尊重である。差別化からは生まれないうことに気づかないのも、毒された価値観のなせる業である。(差別化は差別強化の前段階。)

最近はそのような偏狭な考をもつ方が多くなっている。今後は彼らに正しい認識が育まれるよう言える方はいつでもどこでも言い続けて欲しいものである。